

令和3年度全国学力・学習状況調査 結果の概要

女川町立女川中学校

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準を維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 改善の取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 調査実施月日 令和3年5月27日(木)

3 対象学年 女川中学校第3学年生徒36名 当日実施生徒 33名

4 調査事項及び内容

- (1) 教科に関する調査：国語，数学
- (2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

5 本校と県・全国との比較

	国語	数学
宮城県	かなり下回っている(▼)	かなり下回っている(▼)
全国	かなり下回っている(▼)	大きく下回っている(▼)

6 学力調査結果から

(1) 国語の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・「話合いの話題や方向を捉えて、話す内容を考えることができるかどうかをみる。」の設問について、全国平均をやや上回った。
- ・「文章に表れているものの見方や考え方を捉え、自分の考えをもつことができるかどうかをみる。」の設問について、全国平均を若干上回った。
これらの成果は、日頃から文章の要点をまとめて書き表すことを授業に取り入れているためと考えられる。

(課題)

- ・「書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」においては、全国平均と比較して大きな乖離が見られる。
- ・「相手や場に応じて敬語を適切に使うことができるかどうかをみる。」と「伝えたい事柄が相手に効果的に伝わるように書くことができるかどうかをみる。」の正答率が著しく低かった。

②指導改善のポイント

- ・「書くこと」の設問で正答率が低い設問は、無解答率が高い傾向にある。この点については、学習意欲にも課題がある一方で、知識・技能の面で十分な知識を習得していないことも課題である。単元ごとの知識・技能を確かめるテストなどを定期的に行い、授業中の理解度を確かめつ

つ、指導内容に反映して基礎基本の徹底を図る。

- ・自分の考えを指定された条件で書く学習は、国語科のみならず他教科、ひいては実生活において必要となる資質・能力である。「書くこと」の学習のみならず、各教科や領域、各単元において、「何を書けばよいのか」「どう書けばよいのか」等の、具体的なゴールを明確に示し、文章や資料から読み取った内容を理解しながら、自分の考えを「書く活動」を繰り返し行っていく。そうした学習を繰り返し行い、書くことへの苦手意識を減らし、書こうとする意欲を高めていく。

③質問紙から

- 「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業改善について。
 - ・單元ごとの振り返りを行い、一人一人の理解度を確かめながら進めることが必要である。必要に応じて、不足している点を補足し個に応じた指導を行っていく。
- 「活用する力」の育成を図る授業の充実
 - ・生徒が習得した知識・技能を活用したり、思考を深めたりするには、発問の精度が鍵となる。実生活に応じた発問、生徒自身が考えたいような発問などの、教師側の工夫が必要である。
 - ・教科書で学んだ知識・技能を活用する実践的な問題や、自分の考えを書く活動に繰り返し挑戦させる。加えて、ペアやグループ活動において、対話を通じて考えを共有し、更に自分の考えを広げ深める力を身に付けさせる。
 - ・目的に応じて書いたり、読んだりする意識が県や全国から見ると差が生じている。ねらい(目標)を提示して授業を展開しているものの、教師側と生徒側での理解の違いがあることが分かる。授業中にその都度生徒に確かめ、何に取り組めばよいのか、確実に生徒に捉えられる授業を行うよう意識する。
- 学習に対する興味・関心等について
 - ・国語の授業に対しては、約6割の生徒が好き、またはどちらかといえば好きと回答している。また、国語の勉強は大切だと思うかでは、8割の生徒が大切である、またはどちらかといえばあてはまると回答している。今後、実生活に即した発問を提示し、生活場面において、活用する場面を想定させながら、生徒一人一人がより考えをもち広げ深められる授業の展開を行っていく。
 - ・生徒の興味・関心を引き付ける教材・教具の工夫を行い、授業に対して自主的に取り組む姿勢を身に付けさせる。

(2) 数学の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・数学の理解、学習内容の定着における平均正答率の傾向は、宮城県や全国の傾向と同様であった。
- ・計算、立式、座標の読み取りなど、各領域における学習の基盤を問う問題については、学習の基盤が定着していることをうかがわせる数値である。
- ・「数学的な技能」及び「数量や図形などについての知識・理解」については半数以上の生徒が身

に付けており、学習内容を理解し、定着させていると考えられる。

- ・「記述式」問題において、解答類型以外の解答を出している生徒もあり、正解した生徒を含めると、自分の力で思考し解答を出そうとする生徒が半数以上見られる。

(課題)

- ・平均正答率は、全項目において宮城県や全国のそれを下回った。
- ・領域②「図形」における正答率が低く、図形の基本的な性質を基に平行四辺形の性質を読み取ったり、説明したりする力が劣る。
- ・根拠を示しながら自分の考えを説明する「記述式」問題全てにおいて、正答率がかなり低く、文章力、表現力が劣る。
- ・学習内容の理解に努力を要すると考えられる生徒の割合がやや高い。

②指導改善のポイント

- ・数学における「文章力」と「表現力」を伸ばす指導の充実を図る。そのために、「(理由・根拠)なので(考え・性質)である。」といった簡易な記述から始め、学習内容に応じて適宜文章で説明する時間を授業内に設定し、実践する。
- ・習熟度別学習をこれからも実施し、学習内容の理解に努力を要する生徒への指導を継続していく。

③質問紙から

○「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業改善について

- ・授業の導入時においては、それまでの学習内容を振り返る一問一答や小テストを行ったり、展開の終末時においては確認問題に取り組みせたりして、知識・技能の定着を図る。
- ・教師が小学校学習指導要領を踏まえ、生徒には既習事項の復習や関連付けを行い、学び直しを推進する。
- ・ワークや Qubena 等を用いて問題を多くこなしたり、定期考査や小テストにおいては生徒の解答を細かく採点して自信を付けさせたりするなどの取組を継続する。

○「活用する力」の育成を図る授業の充実について

- ・計算方法、図形等の性質、公式や定理を確認する際、その根拠や関連事項についても確認する。
- ・計算方法等を理解し、覚えた後に、問題演習時間を多く設定したり、応用問題を与えたりする。
- ・学び合いの時間を設定し、自分の考えを伝えたり、友人の考えを取り入れたりさせる。

○学習に対する興味・関心等について

- ・数学で学んだ内容が生活で顕著に生かされている教材を授業に取り入れる。

7 生徒質問紙調査結果から (○成果, ▲課題)

(1) 生活習慣・学習習慣について

○ほとんどの生徒が、朝食を毎日食べて登校している。

○起床については9割の生徒が、毎日同じくらいの時刻に起きている。

▲就寝については、7割の生徒が毎日同じくらいの時刻に寝ているが、残り3割は不規則な就寝になっている。

▲スマートフォンやコンピュータの使い方について、半数以上の生徒は家族との約束を守って

るが、約束を決めていない生徒が3割近くいる。また、ゲームを行う時間について約半数の生徒が1日3時間以上行っている。

(2) 規範意識・自己有用感について

- 将来の夢や目標を7割近くの生徒がもっており、宮城県、全国平均と同程度である。
- いじめについて、ほとんどの生徒が「いじめはどんな理由があってもいけないこと」と認識している。
- ▲自分の思いや感じたことを言葉に表すことを苦手としている生徒が半数近くいる。

(3) 学習に対する興味・関心等について

- 授業以外の読書を行っている生徒が宮城県、全国平均を上回っている。
- 新聞を読む生徒が、宮城県、全国平均を上回っている。
- ▲計画的な学習の取組について、半数以上の生徒は「自分で計画を立てて取り組んでいる」と回答しているが、宮城県平均との比較では大きく下回っている。
- ▲家庭での学習時間について、平日では2割の生徒が「2時間以上」と回答しているが、約半数の生徒が「1～2時間」と回答している。休日については、「1時間以下」と「まったくしない」を合わせた割合が6割を超えており、休日の学習時間の確保が大きな課題である。

8 今後の取組

(1) 「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業等の改善

- ①生徒が「何が分かったか」「何ができるようになったか」を実感できる学習指導の充実
 - ・宮城県教育委員会の示す「学力向上に向けた5つの提言」から、特に「めあて・振り返り」の場面設定を確実にを行い、学習意欲と学習内容の定着を図る。
 - ・校内研究により、生徒に身に付けさせたい「確かな学力」を明確にし、教師が互いに授業を見合うなど、学力向上に向けた指導力の向上を目指す。
- ②個に応じた学習支援の充実
 - ・各教科で現在進めている小テストや単元の振り返りシートなどを活用し、生徒個々の習熟度を把握し、学習課題の設定の一層の工夫をする。
 - ・教科の特性により、習熟度に応じた少人数学習やチームティーチングにより、学習支援を継続していく。
 - ・A I型学習教材(キュービナ)の導入により、過去の学習内容を確認するなど個に応じた振り返りや復習を行えるようにする。
- ③各種検定の積極的な受験の推進
 - ・女川町による検定料の補助を活用し、漢字検定、英語検定、数学検定の受験を積極的に呼び掛け、学習意欲を高める。

(2) 学びの土台となる望ましい生活習慣・学習習慣の形成

- ①基本的生活習慣の確立
 - ・児童会、生徒会を中心に進めている「スーパーうみねこルール」への取組を通して、生活のリズムを整え、健康的な生活を送ることへの意識を高めさせる。
 - ・生徒会の保健・安全委員会で実践している「スマイルタイム」において、真剣な態度で臨んでいる。これを受け、自分の生活の振り返りから生活改善に結び付けながら生活習慣の確立を図る。

②自己有用感の涵養について

- ・学級活動や学校行事への取組を通して、生徒の個性や得意なこと認め、「頑張ってよかった」と思える振り返りの場の設定に継続して取り組む。
- ・生徒の希望や特性に応じた上級学校の紹介はもちろんのこと、学科や学習環境だけではなく、奨学金等の学習支援の制度などを紹介し、自分にふさわしい進路選択ができるように進路学習を進める。

③家庭学習の定着

- ・各教科担当者からの情報により、授業での学習内容や提出課題の内容を確認し、朝の会や帰りの等で確認する。
- ・学習を苦手とする生徒に対し、無理なく取り組める家庭学習の方法を提示し、学習の定着を図る。

(3) 女川小学校, 女川向学館, 地域との連携強化

①小学校との連携

- ・各学年の小学校での学習状況等の情報交換を行うことで、中学校での学習指導の手立てに生かす。
- ・小学校への乗り入れ指導を行うことで、中学校での学習にスムーズに取り組めるようにするための手立てとする。

②女川向学館との連携

- ・放課後学習会や授業における学習支援に協力してもらい、学習支援に取り組む。

③地域人材の活用

- ・生涯学習課との連携を深め、「家読の日」の啓発を行い、「読解力」を身に付けさせる手立てとする。
- ・総合的な学習の時間に取り組んでいる「潮活動」では、生涯学習課と連携して地域人材を中心に講師として招聘し、各講座の学習を進めている。今後も「女川生活実学」の視点から、学習の一層の充実を図る。